

ものを中心に行なう。カントン、(十六番)見つける事は、この風景の美しさを示すためのものである。シェイクスピアの〈目〉のイメージに関する研究(4)

鳴島史之

(平成3年4月30日受理)

### A Study on Shakespeare's Eye Imagery (4)

Fumiyuki NARUSHIMA

#### Abstract

In this paper Petrarch's poems and their influence on Shakespeare, in the writing of his sonnets, will be discussed. In Petrarch's poetry, he employed an association of imagery, such as the linking of *morte* (death) with *occhi* (eyes). This and similar associations appear later in Shakespeare's work, including the use of the image of the sun to indicate divinity, as used by Petrarch in writing of his beloved Laura.

This paper will follow the development of this imagery and conclude that Shakespeare's image of the sun also derives from Petrarch.

## 第二章 他のソネット作家たち

第一章で対象にしたのは Shakespeare のソネットのみであった。ここでは当時の他のソネット作家の言語分析を行う。エリザベス朝以降のソネットの流行が、出版年代からいえば、Soowthern の *Pandora/Diana* (1584) から Habington の *Castara* (1634-40) までを数えるとして、実際のその爆発的ブームは、Sidney に始まり、(*Astrophil and Stella* の制作が1582年頃,) Spenser の *Amoretti* (1595) に終るという説がある<sup>1)</sup>。そしてそれらの土台となったのが Petrarch であったという説である。ここではまず Petrarch の〈目〉のイメージのまとめを自論む。その後で Sidney から Spenser までを通観し、*Pandora* 等の二次的なものへ及ぶつもりである。目的とすることは Shakespeare の〈目〉のイメージの由来をさぐることと、Shakespeare 作品と他との共通性、相違点の発見である。

### 第一節 ペトラルカ

#### 2.1. Petrarch の *Rime* 366篇のうち、圧倒的に多いのはやはり恋に関するイメージである。

具体的には、恋の天使 Cupid(Amor)の矢に心を射抜かれた Petrarch が、燃えるような恋心を、彼が太陽のように崇める Laura に吐露するが、報われず、彼女は他家へ嫁ぎ、彼より先に天国へ旅立つ、後に残された彼の後悔と死のような苦しみ、というのが一連の背景である。

ここに散在するイメージ群—炎(foco)、太陽(sol)、擬人化された Loveつまりキューピッド(Amor)、その弓矢(arco, saetta)、死(morte)ーがほぼそのままイギリスの sonnet sequences のながれの中へ伝わっていき、最終的には Shakespeare によってある複雑な形のパロディ化を受けるわけだ

が、ここではその原典としての Petrarch を詳しく見てみたい。

2.1.1. Petrarch の *Rime* の冒頭からすぐにあらわれ、一貫して姿を見せてはいるのが、Amor である。

Shakespeare のソネットでは Cupid は最後の二篇にしかあらわれない。(Sidney の *Astrophel and Stella* では頻出していたが。) Shakespeareにおいてはかえって「死」の側面がクローズアップされてくるわけであるが、Shakespeare にとっては「死」の具体的な内容 (Cupid の矢そのもの) を語ることよりも、抽象化された「死」の方に興味があつたようだ。

このことは Bermann が指摘した、Petrarch の形式は metonymic であり、Shakespeare のそれは metaphoric である<sup>2)</sup>、ということに関連があるかもしれない。Petrarch は Laura あるいは恋愛そのものの属性としての Cupid 的残酷性を描いているわけで、友人の死を懸念している冒頭の Shakespeare のヴィジョンにはすくなくとも矢を持った Cupid の姿は具体化していなかつたはずだ。

これは題材の違いからくる相違点であるとしても、Cupid というイメージの使われ方の問題として捉える必要を感じる。

さて、Petrarch の *Rime* 2 番にはつぎの一節がある。

My virtue was constrained inside my heart  
To raise there its defence, and in the eyes,  
When the mortal attempt struck by surprise  
Where used to be defeated every dart<sup>3)</sup>.

ここに見られるように、Cupid の矢は〈死〉を導く矢であった<sup>4)</sup>。この場合、〈目〉という語とも接近しているわけで、Petrarchにおいてすでに〈目〉と〈死〉の連想は(〈矢〉を通じて)確立しているように見える。次の 3 番には colpi d'Amor という語が occhi のそばにあらわれる。colpi のみでは〈死〉に結びつくとは思えないが、同様なイメージを含むことは否めない。

14 番になると次のように発展する。

My weary eyes, while I turn you to fly  
Toward the face of the one who makes you bear  
Death, I beg you, beware,  
For Love challenges you, who makes me sigh.

しだいに Amor の攻撃は〈死〉を導くが故に〈死〉と同一化するわけで、39 番になると〈死〉=〈目〉の図式が見られる。

I fear so much the onslaught of the eyes  
In which my death and Love lodge, live and last...

このような、〈死〉と〈目〉、そして Amor の共存を *Rime* 全編について調べると、以下のようなリストになる。occhi と morte がいっしょに出ている文脈を示す。Amor とそれに関連した言及も併記してある。なお、単語のあととの数字は行数である。ここではソネットとバラッドなどの短い

ものを中心に分析する。カンツオーネは長いのでその詩の中の〈目〉のイメージの代表的なものを見て、行数ではなく何行差があるかを示す。番号にBとあるのがバラッド、Cとあるのはカンツオーネである。この表記は Roche に依っている<sup>5)</sup>。

番号	〈目〉	死	Amor	その他
2	occhi 6	mortal 7	Amor 3, arco 3, saetta 8	
3	occhi 4, 10	colpi 6	Amor 6, 9, arco 14	
11B	occhi 14	morte 13	Amor 8	
12C	occhi 4	martiri 10	Amore 9	
14B	occhi 1	morti 2, morte 5, &c.	Amore 4	
17	occhi 3	martiri 7		
23C	occhi	morte(6)		
28C	occhi	mortal(7)	amorosi(8)	
30C	occhi	morte(5)	Amor(3)	
38	occhi 7	consuma 8		
39	occhi 1	assalto 1, morte 2	Amore 2	
44	occhi 14	morto 3	Amor 11, arco 11	
45	occhi 2	mortal 4	Amore 2	
50	occhi	a chi tutto diparte(7)		
55B	occhi 8, 12	morto 11		
59B	occhi 6	morte 16, morendo 15	Amore 5, Amor 17	
61	occhi 4	arco, saette 7	Amor 6	
63B	occhi 1, 6	morte 2		
71C	occhi	mortal(0)	Amor(3)	
73C	be' lumi	morte(5)	Amor(2)	
76	occhi 11	morto 14	Amor 1	
77	occhi 14	mortal 14		
79	occhi 8	morte 14	Amor 5	
84	occhi 1	morte 2, more 8	Amore 5	
87	occhi 5	mora 11	Amor 11, arco 1, colpo 5	
90	occhi 4	mortale 9	arco 14	
94	occhi 1	morto 9		
95	occhi 5	colpo 6		
97	occhi 5	mortale 7, morte 10	strale 3, Amor 12	
110	occhi 13	immortale 8	Amor 1	
112	occhi 11	trafisse 11	Amor 14	
118	occhi 8	Morte 8		
119C	occhi	morto(5)	amor(1)	
126C	occhi	morte(4)	Amor(0)	
127C	occhio	mortal(0)	Amore(2)	
129C	occhi	mortal(0)	Amore(6)	

- 131 occhi 6 martiri 7 amor 1  
 133 occhi 5 mortale 5 Amor 1, 11, strale 1, saette 9  
 134 occhi 9 morte 13 Amore 7, amo 11  
 135C occhi morir(8) Amor(5)  
 141 occhi 3, 6 more 4, morro 10, &c. Amor 7, 12  
 144 occhi 9 mortal 8 Amor 9, arco 12  
 151 occhi 13 mortal 5 Amor 8, Amore 14, strali 8, ali 11  
 154 ric. occhi 7 mortal 6 Amore 8  
 157 occhi 10 Cupid mortal 7 Amor 11  
 171 occhi 6 シンには martir 3 矢を待った Amor 1  
 174 occhi 5 arco 6 (a) Amor 7  
 179 occhi 5 Medusa 10 ても、Cupid はメーリーの胸の胸筋とし  
 195 occhi 14 morte 13 (a) Amor 14  
 197 occhi 14 Medusa 6 頭がある Amor 2  
 198 occhi 3 morte 7 stomach, 1 & Amor 2  
 206C cieca morte(1) heart Amor(4)  
 207C occhi defend morir(11) eyes, Amor(7), strali, arco(9)  
 213 occhi 9 Tempi smalti 9  
 217 occhi 8 defeated morte 14 II, 8 idem 8  
 218 occhi 14 mA, & morte 14 Amor 5  
 220 occhi 13 Cupida disface 10 Amor 1  
 222 occhi 14 arch morte 3  
 232 cieco 7 morendo 6 or という (7) 14th のそばに Amor 1  
 237C occhi 5 morranno(5) Amor(8)  
 241 occhi 11 に発展 infiamma 13 II, 11 idem 8  
 248 occhi 3 Morte 5, mortal 8 II, 11 idem 8  
 253 occhi 9 morte 4 II, 11 idem 8 Amor 4  
 256 occhi 4 distrugge 2, Morte 9 stomach I idem 8  
 264C occhi morir(1) II, 11 Amore(14)  
 267 occhi 1 morte 6 me sigh, 9 shield dardo 5 II, 11 idem 8  
 269 occhi 11 Morte 5 II, 11 idem 8  
 270C occhi morte(2) strali, arco(9) II, 11 idem 8  
 275 occhi 10mA, & Morte 12 stomach, 3 stomach II, 11 idem 8  
 276 occhi 14 Morte 9 stomach, 3 stomach Amore 6 II, 11 idem 8  
 277 occhi 12 outside morta 4 eyes II, 11 idem 8 Amor 1  
 279 occhi 11, 14 consume 9 we and last 8 amor 5 II, 11 idem 8  
 281 occhi 3 (D) Morte 8 II, 11 idem 8  
 282 occhi 3 Morte 3, mortal 4 II, 11 idem 8  
 284 occhi 14 morta 2 出ている Amor 5 II, 11 idem 8  
 292 occhi 1, 7 (a) polvere 8 灰である (D) Infiniti 空から Mood 100% 100%

297	occhi 7	morte 5
300	occhi 14	morte 12
311	bei lumi 10	Morte 8
313	occhi 6	mortal 12
317	occhi 5	Morte 7
320	occhi 3, 10	morto 8
322	occhi 1	Morte 7
331C	ciglio	mori(2), morir(3)
332C	occhi	Morte(3)
335	fenestre 12	mortale 5
339	occhi 1, 13	mortal 3
342	occhi 10	mortal 11, morta 14
344	occhi 14	Morte 9
352	occhi 2	Morte 14
354	occhi 13	morte 11, immortale 3
363	occhi 2	Morte 1
366	occhi	Morte(4), mortali(1)

参考までに付随したデータを挙げておく。366の詩群のうち、occhi の出てくる詩は187あり（ここには duo bei lumi, mie due stelle 等の比喩も含まれる）、morte とその類は160の詩に存在する。そのうち93の morte は occhi と同じソネットに存在する。

重要な部分を具体的な言い方をしてみると、160個の morte のうち、30個は occhi と同行か一行違いであらわれる。約2割の morte は occhi に非常に接近していると言える。冒頭の100番ぐらいまでが occhi と morte の共存がはげしいのだが、40回 morte があらわれるうち、11回は occhi と同行か一行前後にあり、その他のうち18回は occhi と同じソネット内にある。40回のうち11回しかその他の場合がない。7割以上の〈死〉が〈目〉と関わりを持っているのだ。これが単なる偶然だろうか。

Laura の生前の詩の中に occhi と morte の同居が多い。263番までの詩に、101回 morte が出てくるが、そのうち24回は occhi と同行か一行違い、全部で63回の morte は occhi のそばにある。それに比べ、occhi と morte の同居は Laura の死後めっきり少なくなる。最後の約100の詩の中で、occhi と morte が同行か一行違いのものは 6 回しかない。

もちろん、この中のすべての〈死〉を表す語が、必ずしも〈死〉を表すと言い切れないかもしれない。すなわち、ここには mortal 等、〈死〉の文脈からはずれているものも含まれているからだ。ただ、それらを差し引いて考えても、依然として、前の例で言うと100番までのうちの約6割の morte は occhi と関わりをもっていることになる。

それ以外にこれらのデータからわれわれは何を見つけることができるだろうか。まず観察すべきことは、Laura の生前と死後とでは、詩の内容に大きな違いが見られ、その使われる用語自体も異なってくるということである。264番から Laura の死後になるが、morte の出現ははっきり多い。264～366の約100の詩の中に59回〈死〉の文脈がある。その部分の Morte の大文字に注目して欲しい。抽象化され擬人化された〈死〉がまさに Laura を奪って行ったわけであり、それは同じく抽象化されたものとはいえ、冒頭の、〈死〉のような苦しみとはインパクトが違う。言わば、比

喻と現実の違いであり、想像されたものと目にしたものとの違いである。

Laura の死後、〈死〉と〈目〉の接近度は薄れたが、逆に〈死〉の出現度は増した。これはこんなふうに解釈できようか。すなわち、Laura の死自体の文脈が多くなったおかげで、〈死〉の抽象度、あるいは象徴としてさまざまなイメージを喚起する力が減少したのだ、と。誤解を恐れないと、大文字の Morte のほうが抽象度が低いのだ。

以上のように通観してみると、Shakespeare に見られた〈死〉と〈目〉の連想のルーツは、Petrarch に端を発していると言えるかもしれない。

**2.1.2.** Laura の姿は太陽を思わせるほど神々しい。そこまでは比喩として確立しているだろう。しかし「太陽」と女性の〈目〉の連想は Petrarch をはじめ Shakespeare に至るソネット作家が好んで用いる比喩であるが、Petrarch の中で完成していたとは言い難いように見える。その比喩の発展の歴史を中心に、〈目〉と「太陽」の関連性を見てみたい。まず、Petrarch の「太陽」の総体は次のようにある。番号のあとに s とあるのはソネット形式、太陽=Laura の項は、比喩として確立しているときは= Laura、自然の太陽の場合は何も書いていない。

番号	〈太陽〉	〈光〉	〈目〉	〈太陽〉=Laura
3 s	sol 1	rai 2	occhi 4, 10	= Laura
4 s	un sol 2	rai 1	occhi 11	= Laura
9 s	un sole 10	rail 1	occhi 14	= Laura
11 s	sole 1	lume 14	occhi 14	= Laura
19 s	sol 2	lume 14	occhi 12	= Laura
22	sole 14	lume 14	occhi 13	= Laura
23	sol 1	lume 14	occhi 13	= Laura
28	sole 1	lume 14	occhi 13	= Laura
29	sol 1	lume 14	occhi 13	= Laura
30	sol 1	lume 14	occhi 13	= Laura
31 s	Sole 6	lume 5	occhi 13	= Laura
41	Sol 7	Morte & mortal 8	occhi 13	= Laura
43	Latona's son 1	lume 5	occhi 13	= Laura
57	sol 7	lume 5	occhi 13	= Laura
60 s	Sol 13	lume 5	occhi 13	= Laura
90 s	un vivo sole 12	lume 3	occhi 4	= Laura
95 s	sol 10	raggio 10	occhi 5	= Laura
100 s	un sol 1	raggio 10	luci 14	= Laura
110 s	sole 6	lucenti 13	occhi 13	= Laura
115 s	Sole 4	lucenti 13	occhi 6	= Laura
119	sol	lucenti 13	occhi 7	= Laura
133 s	sol 2, sole 8,	un sole 9	occhi 5	= Laura
135	Sol 1	lucenti 13	occhi 1)	= Laura
144 s	sol 1	lucenti 13	occhi 9	= Laura
145 s	sole 1	lucenti 13	occhi 10	= Laura
153 s	sol 14	lucenti 13	occhi 11	= Laura



308 s sole 13 間像 3 idea のと日にしたものとの違いである。 & loz = Laura 21  
311 s sol 10 lumi fed rub 度は薄れたが、逆に duo bei lumi 13 slo piu 2011 こ  
321 s Sol' 8 M. 15 idea Laura の死自体の文 occhi 14 & lafisio = Laura 21の抽  
325 s sol してさ 101 idea ページを鳴らすと occhi(1) 21の行 slo 2011 な  
327 s sol 5 forte の 11 idea luce 6 低いのだ。 M. elo Come 21  
339 s sol 13 みると Shakespeare に見られた occhi 1, 13 21の行 slo 2011  
341 s sol 14 見るか 11 idea 9 los 2011  
347 s sol 11 異を思ふ 11 idea ど神をしい、そこま occhi 11 11の行 slo = Laura 21の  
348 s sol 3 11の連想は Perranch をはじめ occhi 1 2011 に 11の行 slo  
352 s sol 2, Sol 13 idea 中で完成して emul occhi 2 11の行 slo piu 2011 七輪の  
359 s sol 11の連想の開拓性を見てみた occhi(1) Pe & S. 21の紀体  
363 s sol 1 1号の 11 idea あるのはソネラト形 occhi 2 11の行 slo = Laura 21として  
開拓しているときは Laura & It 11 idea 太陽の場合は何も書いてない & loz & slo 21 100

特に最後の方で Laura は太陽と同様かまたはより輝かしく描かれ、Laura の目=sol の図式があらわれる。例えば、300番以降の sol は13回あるが、そのうち 8 回は occhi と同行か一行違いであらわれる。どこからかそのような関係が成立するのだが、冒頭の詩群には出てこない。詩篇が進むにつれて、Laura のある特徴が抽象されていくのだが、その筋道をたどってみよう。

冒頭の詩群の sol はあくまでも自然物で、Laura を sol にたとえる場合でも不定冠詞 un を付けて(4番、9番)、比喩として使っている。Laura の occhi が周囲にあらわれるとしても、occhi の属性として光を発するという当時の信仰への言及が多く、sol=occhi という図式は成り立っていない。occhi は rai や lumi という特徴に結び付いているだけである。

23番、28番の長い詩にも sol が出るが、それぞれは occhi と離れすぎていて関係は認められない。29番になって sol と occhi は接近するが、(occhi は Laura の目)、sol は自然物でしかない。30番の sol もそうである。

90番の sole も un が付き、occhi = lume の属性という関係である。95番も Come raggio di sol という直喻で、occhi = raggio の関係である。

100番で注目すべき表現は、Quella finestra ove l'un sol si vede、という部分で、ここに至ってやっと occhi = sol の関係が見え隠れしているように思える。ただここにあるのは窓の比喩だけでく目を示す14行の le luce は Petrarch の目である。

そして110番で

Turning, I saw a shadow that near me  
Blotted the sun, and I looked up to find  
A lady who, if I know well my mind,  
Should have been given immortality.

とある部分において Laura の神格化は完成する。太陽を消し去るがかりの（原語は stampava 'impressed'）姿があらわれるわけで、このたとえは詩編の最後まで存続する。特き immortale という語句も注目に値する。

115番の occhi は Petrarch の目で、Laura = Sole ではあるが、Sole = occhi はない。  
119番で Laura と sol の光の比較があるが、occhi は世人の目で sol とは無関係。

133番、Laura の目から'l colpo mortale が発せられる。そしてその顔が un sole のようなのだから、比喩としては成立しているが、Laura の目の特性が問題とされるより、全体としての神々しさに視点があるのだから、sole は自然物としての意を多く引きずっている。例えはあとで出るようすに347番のような her eye's sun というような言い切り方からは遠いといえるだろう。

135、144、154番の sol は自然物。

156番で Laura の duo bei lumi は太陽に invidia(envy) される。

158番の sole は自然物だが、Laura の occhi と同行にある。

162、165番の sole は自然物。

173番の1行 (Mirando 'l sol de' begli occhi sereno,) で Laura's eyes = sol が確立する。ただそのつぎの175番では、sol と occhi は同行であっても、(Quel sol, che solo a gli occhi mei resplende,) occhi は Petrarch の目である。

176番でも Laura = mio sol だが、occhi は Petrarch の目。

181番で Laura の目は太陽に勝る。

186、188番で Laura = sole だが occhi は Petrarch の目。この付近まで見ているのはすべて Petrarch の目。

190番で sol は自然物。occhi は Petrarch の目。

194番、mio sole = Laura.

197、198番、sol は自然物だが、ここから occhi = Laura の目となる。特に197番において Laura が Medusa になぞらえられていることが注目されよう。やはり Laura の目から光線が発射されるというイメージが Laura = sol につながっていく。

200番の sol は自然物だが、Laura の occhi との比較がなされている。

208、212番、このあたりから Laura = 太陽はほとんど完成する。220番から231番ぐらいまでの sol はすべて Laura をあらわしている。とくに220番では Laura の occhi と sol は一行違いであらわれ、sol は形としては自然物をあらわすが、光を発するという特徴から Laura の目と強くむすびつくことになる。

233番では9行目に From her right eye, rather from the right sun とあるように、ほぼイメージ的にも sol = occhio は定着する。

246、248、252番の sole は Laura で、occhi は Petrarch の目。

254、255番の un sole は Laura で、特に255番の sole は Laura の目である可能性が高い。

275番、このあたりから sol と occhi は同行か一行違いぐらいで接近して使われる。Laura の死後の詩群であることと関連があるのだろうか。275番では occhi は Petrarch のものであるが、このあとだいたいの occhi は Laura のものようだ。Laura の occhi と太陽のような Laura の存在のイメージの融合がなされていく。

311番、10行目 (Those two fair eyes, clearer than sun their spark,) のような形が、最終的に Petrarch がイメージとして求めていたものであるようだ。

347番以降の定着したイメージを最後に示すことでこの項を終えたい。(イタリックは筆者。)

347番、11行目。Asked anything from you save your eyes' sun;...

348番、1-3行目。From the most beauteous eyes, the clearest face/That ever shone, and from the fairest hair/Which made and sun and gold appear less fair,...

352番、2行目。Your eyes which are more limpid than the sun,...

359番。...and those fair eyes /That were my sun ?

363番、1-2行。Death quelled the sun wonted to overwhelm/Me, and her perfect, wholesome eyes are dark;...

以上見てきたように、ソネットという形式に特有で不可欠であると思われていた太陽のイメージも、その創始者である Petrarch の中で発展の歴史を持っていたわけであり、最初から確立されていたものと考えることは誤りであると思われる。太陽と Laura と目は Laura の死を通してはじめて結び付くのである。

注

- 1) Holger M. Klein, ed., *English and Scottish Sonnet Sequences of the Renaissance* (Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1984), I, p. 4.
  - 2) Sandra L. Bernmann, *The Sonnet Over Time* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1988), p. 6.
  - 3) Petrarchからの引用は、Petrarch, *Sonnets & Songs*, trans. Anna Maria Armi (New York: Pantheon, 1946)に拠る。場合により原語で示した。なお、貴重なコピーを貸していただいた津田塾大学の小林稔先生にあらためて感謝を表したい。
  - 4) Calderwoodはその最近の *Othello* 研究の中で、Othelloたちが滞在する宿の名である『いて座』の意味に注目しているが、( *The Properties of Othello* (Univ. of Massachusetts Press, 1989), pp. 22-25)、その部分についての注釈の中に筆者が注目する言及がある。Rowlandからの孫引きなのであるが、(Beryl Rowland, *Animals with Human Faces: A Guide to Animal Symbolism* (Knoxville: Univ. of Tennessee Press, 1973), p. 53)、射手としてのケンタウロスは男性の *ejaculatio seminis* の行為のシンボルとして使われたとある。そうだとすれば、Cupidの射手としての性格も同様な象徴性を持つと考えられるのではないだろうか。
  - 5) Thomas P. Roche, Jr., *Petrarch and the English Sonnet Sequences* (New York: AMS Press, 1989), pp. 536-545.